

# 明治初期のロシア語教育と 対露外交担当者の動向について

本田理梨子

(小川原研究会 4 年)

- I はじめに
- II 日本国内におけるロシア語教育事情
  - 1 旧東京外国語学校の様子——魯語科を中心に
  - 2 旧東京外国語学校卒業生の進路について
- III 幕末・明治初期のロシアへの留学生について
  - 1 明治政府の留学生政策の概観
  - 2 初期のロシア留学生について
  - 3 西徳二郎の例
  - 4 小 括
- IV 明治最初期の在露日本国公使館の様子について——勤務者・関係者を中心に
  - 1 在露日本国公使館の設立経緯について
  - 2 初期在露日本国公使館勤務者・関係者について
- V 結 び

## I はじめに

外国と接するうえで避けては通れないのが言葉の問題である。それは古今東西変わらず、外交活動の最前線では、現地の言語や文化に堪能な人材が多数活躍している<sup>1)</sup>。幕末になり、本格的に西洋各国との交流が始まる中、ロシアとの関係構築も日本外交の重要な課題の一つであった。このことは、その活動を支える優秀なロシア語人材を育成する必要性も生じさせた。隣国であり、また対外政策上も重要な国である「ロシア」と「ロシア語」について、日本人はどのように向き

合ってきたのか。日本におけるロシア語教育の歴史については、『東京外国語大学史』や『日本人とロシア語』、および『東京外国語学校史——外国語を学んだ人たち』などで、その概略や各学校の卒業生の動向について一定程度明らかになっている<sup>2)</sup>。また、日露交流史の文脈で、江戸時代における漂流民についてや、慶應元年に幕府より派遣された遣露伝習生についての研究も存在する<sup>3)</sup>。明治初期の対露外交を担った人材については、榎本武揚<sup>4)</sup>や西徳二郎<sup>5)</sup>の伝記が編纂されているほか、条約改正交渉等個別の外交案件の検討の中で当時の公使の動向に触れた研究が存在する<sup>6)</sup>。また花房義質の日記については現在解読と検証が進んでいるようである<sup>7)</sup>。しかし、ロシア語力を活かして特に活躍したであろう書記官級以下の在露日本国公使館職員の動向に注目した研究は、市川文吉<sup>8)</sup>に関するものを除き、管見の限り見当たらない。これらの先行研究をふまえ、本論文では明治初期のロシア語教育と対露外交担当者の連関に注目し、明治初期のロシア語教育が担っていた役割、および外交活動への影響について、資料に基づいて実証する。具体的にはまず、官立のロシア語教育機関として旧東京外国語学校の実態を調査・分析し、外交実務との連携について考察する。次に、明治初期におけるロシアへの留学生の実態について、特に派遣動向に注目して分析する。さらに、明治6(1874)年設置の在露日本国公使館の設立経緯と構成員を特定し、ロシアにおける明治初期の在外使臣制度の形成過程の一端を明らかにする。これらの分析を通じて、明治初期の対露外交に、ロシア語とロシア事情に明るい人材がどのように関与していたのか明らかにしていくことが、本論文の主眼である。

## II 日本国内におけるロシア語教育事情

### 1 旧東京外国語学校の様子——魯語科を中心に

日本におけるロシア語教育は、寛政4(1792)年の、大黒屋光太夫の帰国をもって始まるとされる<sup>9)</sup>。光太夫の例に象徴されるように、「江戸期のロシア語の学習・教育・研究は漂流と外交とさらに軍事へと不可分に結びついており<sup>10)</sup>」、その結果、その後のわが国のロシア語・ロシア研究の基底部は外交と軍事的要素が構築することになった<sup>11)</sup>。文化5(1808)年のフェートン号事件後、幕府は長崎の蘭通詞の一部に対して英語とロシア語の学修を命じた<sup>12)</sup>。この時が、政府によるロシア語人材育成の始まりと言えよう。江戸後期にかけて本格的に西洋各国との外交関係が樹立されるなかで、「外国の書物の翻訳、調査機関から脱して、教

育機関として研究と陪臣らの外国語学習など、対ヨーロッパ教育の中核的機関<sup>13)</sup>」として文久3(1863)年に開成所が設置された。しかし魯西亜語科は「設置するも人材なく開店休業<sup>14)</sup>」状態であったという。

開成所は、明治元(1868)年に新政府に接収され、「開成学校」となり、その半年後に「大学校」の「大学分局」になったものの、その半年後に大学校が「大学」と改称されたのを機に大学分局は「大学南校」となった。明治4(1871)年に文部省が創立すると、大学南校は同省の所管となり「南校」と改称され、その後学制改革により「第一大学区第一番中学」になり、明治6年に再び「開成学校」と改称された<sup>15)</sup>。開成学校は、「各国ノ語学ヲ教フルニ始リ外務省所管語学所ヲ取管スル<sup>16)</sup>」として誕生したものの、当初ロシア語科と中国語科はなかった<sup>17)</sup>。それに代わるものとして、外務省は「外交実務に役立てる通弁を養成するために漢語学所と洋語学所を四年二月に設置して<sup>18)</sup>」おり、初期の対露外交実務に関するロシア語教育は、ここでも行われていたと推察される。明治6年5月に、外務省設置の独魯清語科が文部省扱いになり、かつ外国語学校則に準じて学級および教科が整備された<sup>19)</sup>。こうして旧東京外国語学校は、一橋通町一番地に設置され、明治18年に東京商業学校に吸収合併されるまで12年間存続した<sup>20)</sup>。なお、旧東京外国語学校の開校日について、文部省第一年報では、明治6年8月に「開成学校新築成り<sup>21)</sup>……遂ニ同所ヲ東京外国語学校ト称シ外務省語学所ヲ合併ス学科ハ英佛獨魯清ノ語学ヲ授ク<sup>22)</sup>」としているが、『東京外国語大学史』では、明治6年11月4日、旧開成学校跡地に東京外国語学校が開校したとなっている<sup>23)</sup>。

旧東京外国語学校の各語科は、上等と下等に大別され、それぞれ第一級から第四級にクラス分けされていた<sup>24)</sup>。修業年限は4年制として発足したが、幾度かの改正を経て、明治15年9月以降は1年2学期の5年制が採られた<sup>25)</sup>。発足初年度の明治6年の魯語科は、下等第一級に5人、下等第四級に9人の計14名で構成されていた<sup>26)</sup>。下等第一級の教科書は、魯国史(イロハイスキー)、小兒の世界(ウシンスキー)、万国史(シユルギン)、算術書(アレキサンドル)、文典(アントノフ)、四ヶ国字書(レイフ)、魯国辞書、欧羅巴地理書(イリニツキー)、地理図を使っていたことが確認できる<sup>27)</sup>。

以上のことから、明治最初期には政府管轄の語学教育が存在し、それは専ら実務家育成を主目的として始まったことがわかる。実務家志向から幅広い外国事情の研究教育機関への転換点だが、旧東京外国語学校の誕生であった。旧東京外国語学校は、それまで文部省が英語・フランス語・ドイツ語の学科を、外務省がロシ

ア語・中国語の学科を管轄していた状態から、両者を統合して「新しい語学専門教育機関」<sup>28)</sup>を発足させた果実であったといえよう。他方、旧東京外国語学校設立の過程からは、明治政府が外交実務の遂行にあたり外国語に強い人材の育成の必要性を感じていながら、外国語教育の専門課程の所管を外務省か文部省とするかで混乱していた様子もうかがえる。最終的に語学専門の教育機関が文部省の管轄になったことは、当時の外国語の習得の目的が、必ずしも通訳者や外交担当者育成を意味しなくなったことを示唆する。それは旧東京外国語学校でロシア語を教えたレフ・メーチニコフが指摘したように、旧東京外国語学校には、「第一に外交およびその他の公用にあたる主要ヨーロッパ語の通訳の一定のスタッフを養成し、第二に大学でヨーロッパの英知を身に付け、しかるのち日本の学校でそれらの英知の普及者になってくれるような一定数の学生を養成する<sup>29)</sup>」役割を与えられたことを意味する。旧東京外国語学校の発足は、政府の高等教育機関における外国語教育政策が、単に通訳官の養成にとどまらない、ヨーロッパの学問を学ぶための語学教育を志向し始めた証といえよう。ただし、このような語学教育の目的の拡大は、英・仏・独語科が主であり、清・露・朝鮮語科においては、後述するように語学の専門家の育成に依然として主眼を置いていた。旧東京外国語学校は、東京開成学校を進学先とする予備教育機関という位置づけでもあった。しかし、東京開成学校（および後身の東京大学）の教育言語は英語、次いでフランス語とドイツ語だったため、学校設立の経緯とは裏腹に、「露語学生、漢語学生、朝鮮語学科生には進学校がなく、これらの語学ではもっぱら通訳を主とする語学技能者の養成が図られ<sup>30)</sup>」ることになったのである。こうした語学の専門家を確保するために、政府は官費生の制度を整え、生徒たちに対して経済的支援も行って<sup>31)</sup>いた。すなわち、旧東京外国語学校で清・露・朝鮮語を学ぶことは、一定程度その後のキャリアと連動する可能性が制度上は大きかったことを意味する。では、本当にロシア語人材の育成が、政府の狙い通りに達成できたのか。東京外国語学校魯語科の様子と、東京外国語学校魯語科卒業生について分析し、日露関係の構築に彼らがどのように関与していたのか、次項で分析する。

## 2 旧東京外国語学校卒業生の進路について

旧東京外国語学校魯語科の卒業生について、以下に判明した分を記す。東京外国語学校は明治12年に初めての卒業生を5名送り出した。初代卒業生のうち3名が魯語科出身者であった<sup>32)</sup>。武藤精次郎、福田眞彦、加藤稚雄である。続いて明

治13年2月に斎藤安右衛門、小島泰次郎、千葉文爾、神戸應一、同年7月に下村克己、明治14年2月に成瀬駒二郎、鈴木於菟平、小島倉太郎、明治15年に山村栄、亀高西正平、芥川晁孝、明治16年に片岡旗郎、矢崎鎮四郎、明治17年に安岡盛長、川上俊彦、鈴木要三郎、加藤寅三がそれぞれ卒業している<sup>33)</sup>。

続いて、各人の卒業後の進路を一部概観したい。まず明治14年に卒業した小島倉太郎は、開拓使函館支庁記録外事係でロシア語通訳官として働いた<sup>34)</sup>。明治16年に卒業した矢崎鎮四郎は、卒業後坪内逍遙と接触し、言文一致運動に関わっていた時期がある。また統計院が廃止されるまで、卒業後2年間勤めていたという。明治29年4月から9月には、商社の通訳として渡露している。明治37年の日露開戦とともに大本営幕僚事務扱に就任した。戦後は陸軍士官学校ロシア語教官に就任し、明治39年から大正12年まで17年間務めた<sup>35)</sup>。日露関係の変化によりロシア語ができる人材として活躍していった例といえるだろう。

明治17年に卒業し、外交官として活躍した川上俊彦は、昭和10年9月に鎌倉で没するまで、官界、民間双方で、日露および東アジア関係に携わった。東京外国語学校卒業後は外務省に就職し、明治19年に釜山領事館書記生としてキャリアを開始した。サンフランシスコ領事館書記生を経て明治25年にペテルブルク日本公使館書記生となったのち、明治33年にはウラジオストク貿易事務官に就任した。この時、ペテルブルクで親交のあった海軍留学生廣瀬武夫と再会したという。明治37年2月の日露開戦直前には、ロシア軍務知事と折衝し、ウラジオストクにいた管下在留日本人約6500人のほとんどを無事に退避させることに成功した。この交渉では、川上のロシア語力が十分に生かされたことが容易に推察できる。日露戦中は遼東守備軍司令部付外交事務官として勤務した。戦後はウラジオストク貿易事務官に復帰し、明治40年にハルビン総領事に転出した。明治42年に伊東博文がハルビンで襲撃されたとき、通訳として同行していた川上も重傷を負っている。明治45年にはモスクワ総領事に就任した。大正2年に満鉄理事に就任、大正9年にポーランド駐劄特命全権公使を拝命している。帰国後の大正15年には北樺太鉱業株式会社社長を、昭和2年には日魯漁業株式会社社長を務めた<sup>36)</sup>。民間の立場でも日露関係の維持促進に貢献していたことが示される。

ロシア語教師になった者もいた。小島泰次郎と鈴木於菟平は共に、第二期東京外国語学校で教鞭をとった<sup>37)</sup>。

卒業生ではないが、安藤謙介についても若干言及したい。安藤は旧東京外国語学校を放校されたものの外務省で勤務を開始し、「明治9年4月に創設されたサ

ハリン・コルサコフ（旧樺太函泊）の日本領事館の書記一等見習に任ぜられ<sup>38)</sup>」た。（「同時に魯語学五等教諭大前退蔵が同領事館二等書記官生になっている」<sup>39)</sup>）明治11年には「ペテルブルク公使館に書記生として赴任、在職中にペテルブルク大学で行政学を学び、また同大学日本語講師もつとめた<sup>40)</sup>」という。明治18年に帰国後は、「検事、検事正となって各地に赴任し、二十九年から富山県、千葉、愛媛、長崎、新潟の各県知事、衆議院議員、大正期には横浜、京都の各市長を歴任した」<sup>41)</sup>。

このように見ていくと、一般的には「魯語科の生徒のなかからは、わが国の近代史に名を残すような人物がほとんど出なかった<sup>42)</sup>」とされるが、その実際は、政府中枢ではなくとも、ロシア語力を活かして近代日本の対露関係に貢献した人物が少なくないことは明らかだ。「明治十八年に一度廃校となるまでの外国語学校露語科出身者には、外務、陸海軍、実業界等に活躍した知名の士が多い」<sup>43)</sup>という平岡雅英氏の指摘は外れていない。特に、日露戦争前後で日露関係が大きく動く趨勢の中、明治初期に魯語科を卒業し職業人としての経験も豊富な彼らは、本人たちが望むと望まずとにかかわらず、ロシア語・ロシア事情に明るい人材として重宝される傾向にあったことがうかがえる。ただし、旧東京外国語学校魯語科卒業生については、他の語科に比べて少数であること、また、卒業後の消息が明らかになっていない人物もいることには留意したい。また、ロシア語人材が目覚ましく活躍するのは、やはり日露戦争前後からであり、この時期に活躍した卒業生のキャリア形成とロシア語教育の連関については、第二次外語世代の卒業生と併せた分析となろう<sup>44)</sup>。

### Ⅲ 幕末・明治初期のロシアへの留学生について

#### 1 明治政府の留学生政策の概観

明治政府は近代化を進めるにあたり、優秀な若者を積極的に留学させ、西洋文明の吸収に努めた。しかし、政府派遣の留学生は、徳川政権末期から存在していたことを忘れてはならない。明治維新によって幕府、つまり留学生の派遣元が瓦解したことにより、「明治政府の海外留学生対策は、新政府としての立場から幕末の留学生引揚げから開始され<sup>45)</sup>」た。幕末からの留学生の実態把握が進むに従い、「明治三年五月には「外国渡海出願規則」、同十二月には「海外留学規則」等も定められ、国家的使命の奉体を濃厚に盛り込んだ渡航留学制度が確立すること

となった<sup>46)</sup>」。明治5（1872）年に制定された学制では、第58章から第88章にかけて海外留学生に関する諸規則が明記されている。このようにして、明治政府は近代国家としての発展をけん引する人材を育成すべく、政府の指針・管理の下、各国へ留学生を送り出す政策を整備していったのである。

## 2 初期のロシア留学生について

### (1) 幕末

近世以降江戸時代の大部分で、ロシアへ渡航した日本人は、専ら漂流民として偶然に渡航した人物たちであった。慶應2（1866）年に日本人の海外渡航が解禁される以前に、意志をもってロシアへ向けて出国した人物の例には、橋耕齋<sup>47)</sup>があげられる。橋は安政2（1855）年、下田に来航したプチャーチンの船に乗って密出国することに成功し、その後ロシアで「外務省アジア局に勤務し、まもなく正教徒に改宗してヤマトフと名乗った」<sup>48)</sup>。「安政4年1857外交官ゴシケウィッチと協力して橋耕齋という名で『和魯通言比考』を著わした」<sup>49)</sup>。文久の遣欧使節がロシアに滞在した際、ロシア側の接遇を陰で支えた人物が橋であることは、福澤諭吉も認めている<sup>50)</sup>。橋は、明治6年に岩倉使節団が訪露した際、大使の勧めで日本への帰国を果たした<sup>51)</sup>。

組織的に、目的をもって「留学生」として最初にロシアに赴いたのは慶應元（1865）年、幕府派遣の遣露伝習生一行だ。彼らに関する研究は内藤遂氏<sup>52)</sup>や宮永孝氏の研究<sup>53)</sup>などに詳しい。

### (2) 明治初期

明治政府も発足後まもなく、官命でロシアに複数人を留学させている。背景には、明治2（1869）年に「ロシアがにわかにな樺太の領有化を強行しはじめて対ロシア脅威感、そしてこの隣国への関心が高まる一方、日本—ウラジオストック間を日本人も行き来するようになって日露間交渉が多様化し、ロシア国情についての知識がますます必要となってきた<sup>54)</sup>」ことがある。明治2年に加賀藩所属で嵯峨寿安の渡航を許可したことを嚆矢に、明治3年に西徳二郎と小野寺魯一を留学生としてペテルブルクに留学させた。翌4年には古川常一郎が外務省留学生としてウラジオストックに派遣されている<sup>55)</sup>。彼らは、官命を受けて、在露日本国公使館設立以前にロシアに渡航した日本人の世代である。また明治3年に派遣された市川文吉も、官費ロシア留学生と確認できる<sup>56)</sup>。明治4年では官費生が7名、

県費生が嵯峨寿安(金沢県)1名の合計8名とされる。官費留学生としては、市川文吉(静岡県)、西徳二郎(鹿児島県)、小野寺魯一(仙台県)、服部敬次郎(大泉県)、山川健次郎(斗南県)、土肥百之(東京府貫属)、来見甲藏(広川開拓大主典男)が確認できる<sup>57)</sup>。加えて、明治4年10月12日付で坊城俊章がロシア留学生となっている<sup>58)</sup>。明治5年の滞露留学生は9名となっている<sup>59)</sup>。ただし明治4、5年頃のロシア留学生の実態については、次項の岩倉使節団随行留学生のデータと整合性がとれていないため、今後さらなる検討が待たれる。

### (3) 岩倉使節団随行留学生

岩倉使節団は、明治4年11月から明治6年9月まで「条約改正の予備交渉と西欧先進諸国の制度文物の視察を主目的として派遣され<sup>60)</sup>」、留学生団も組織されて随行した。このなかにはロシア留学生もおり、清水谷公考(公家)、坊城俊章(公家)、万里小路秀麿(公家)、平田範静(東助)(米沢藩)、松崎信麿(公家)、土肥百次(東京)、来見甲藏(東京)が確認できる<sup>61)</sup>。清水谷は初代北海道知事や開拓使次官を務め、函館戦争では総督を務めていた。ロシアをはじめヨーロッパなどに4年間滞在了。坊城はロシアやドイツを遊学し、軍事研究にあたった。帰国後は陸軍で活躍し、日清戦争にも従軍した<sup>62)</sup>。また貴族院議員も務めた<sup>63)</sup>。万里小路は式部官や大善頭心得を務めた<sup>64)</sup>。平田は帰国後、法制局長官や枢密顧問官、各大臣を務めている<sup>65)</sup>。松崎は公家の出身で、建築方面で活躍したがのちに爵位を返上している<sup>66)</sup>。来見は開拓使御用掛として活躍したほか、帰国後は在兵庫ロシア領事館に勤務した<sup>67)</sup>。

岩倉使節団は「すでに外国にあって勉学中の留学生を各国で動員し、連絡をとり、彼等に通訳をさせるとともに、案内役をつとめさせることが、もっとも巡遊を効果あらしめる一つの方法であると考えた<sup>68)</sup>」ため、各地で現地在住の日本人と連絡を取っていた。また、明治最初期の在外邦人、特に留学生の生活実態を一元的に管理できていなかった明治政府は、「留学生の生活状況や学業状況を的確に調査し、これを基礎材料として留学規則をより一層整備すべき使命<sup>69)</sup>」も持っていたため、各地で積極的に留学生と連携を取ることに努めていた<sup>70)</sup>。露都においても西や市川が岩倉使節団の便宜供与に携わっていた<sup>71)</sup>。

### (4) 文部省派遣留学生制度整備後

戦前の留学制度は、出資母体の違いから公費留学と私費留学に大別できた。官

費留学については、明治8（1875）年に文部省派遣留学生制度が整った。この年に第一回の派遣が行われたのを皮切りに、この制度は1940年まで続き、3180人が派遣された<sup>72)</sup>。明治8年以降は、各省庁が目的に応じて一定数独自に留学生を派遣することもあったが、文部省留学生は他省と比べて派遣人数が多かったうえ、国内の教育に与えた影響も大きく、「近代日本の留学制度の先駆であり雛形であっ<sup>73)</sup>」た点で、「文部省留学生を考察すること抜きには近代日本の留学史は語るができない<sup>74)</sup>」といえよう。

明治時代にロシアへ文部省派遣で渡航した留学生は、明治34年の八杉貞利のみである。1940年までに、文部省留学生としてロシア単国を渡航先にしたのも八杉の例のみだ<sup>75)</sup>。よって、戦前期のロシアについては、文部省以外の省庁からの派遣で留学している留学生の存在を無視することはできないだろう。本論文では詳細な検討は行わないが、他省庁派遣の留学生の実態についても、特にロシア留学生の場合は一層の分析と考察が求められるといえる。

### （5）開拓使派遣

開拓使派遣の留学生も存在した。「政府は明治二年七月に開拓使を設置し、翌年五月には黒田清隆を次官に任命し、もっぱら樺太のことを主管させることとした。しかし彼は樺太視察後、明治三年十月に帰京して政府に建議した。……書生を精選して海外諸国に派遣すべきこと等を説いている<sup>76)</sup>」黒田は薩長とのつながりを活かしてこの建議を政府に認めさせ、留学生として露国4名、米国3名を選抜している。だが結局、「ロシア留学が無意味であることがわかり……薩摩の二木彦七だけが露国に行くことにな<sup>77)</sup>」った。開拓使が明治4年以降実際に派遣した留学生は総勢28名で、ロシアに派遣された者は4名であった<sup>78)</sup>。

## 3 西徳二郎の例

明治初期のロシア留学生のうち、対露外交で顕著な功績を残した人物に、西徳二郎があげられる。西は弘化4（1847）年7月25日に生まれ、明治政府派遣のロシア留学生、ロシア公使館勤務等を経て太政官、露国駐劄特命全権公使、枢密顧問官、外務大臣、清国駐劄特命全権公使等を歴任し、明治45年3月13日に逝去した人物である<sup>79)</sup>。ロシア留学中はロシア・サンクトペテルブルク大学法政科で学び、外務省ではロシア語を駆使して大陸外交に深く関わった点で、明治時代の対露外交を支えた重要人物であるといえよう。本節では、西のロシア留学時代およ

びロシア在勤時代を中心に、彼のロシア語学習歴とロシアでの行動に迫ってみる。

### (1) 誕生から渡航まで

西は、父・西藤左衛門、母・ヒロのもとに、弘化4(1847)年7月25日、薩摩藩鹿児島城下で誕生した<sup>80)</sup>。13歳から藩校造士館に通い、武道は柔剣二道を修業した<sup>81)</sup>という。16、17歳ごろ、薩摩藩主・島津斉彬の命令で長崎遊学し、「砲術と操兵式とを修得」<sup>82)</sup>した。幕末にはその知識をもって倒幕運動に藩の一員として参加し、慶應4(1868)年の戊辰戦争にも出兵した<sup>83)</sup>。

戊辰戦争を経て、明治2(1869)年に上京し、外国語を学ぶべく昌平学校に入学した。この時何語を学ぼうとしていたのかは定かではないが、海外留学の志は、上京するときには既に持っていたという<sup>84)</sup>。上京まもない明治2年4月28日には、大学少舎長(判任官三等正八位)に任命された。少舎長の任務は、「大学寄宿舎の舎監であり、生徒監督<sup>85)</sup>」であった。

昌平校在学中に、樺太におけるロシア人の振舞いが国民世論に火をつけ、「東京にては物議騒然」<sup>86)</sup>となった。この世論の中で、西は「對露問題の解決は親しく露国に赴きて同国の事情を研究して後に行わねばならぬと考へ、『入露説』の一文を作りて、黒田清隆を経て大久保利通に呈し、自ら進んで露都に赴くの決意を告た」<sup>87)</sup>という。入露説の詳細や、この件について黒田と大久保のやり取りは確認できていないが、明治2年6月4日、西は外務省の小野寺魯一と共にロシア派遣の命令を受けた<sup>88)</sup>。渡航に先立ち、大久保利通主宰で行われた黒田清隆開拓次官の北海道赴任に伴う送別会に西も招待され、激励を受けている。短刀と錢別も受け取っていることから<sup>89)</sup>、西は渡航前から、大久保や黒田という政府中枢の人物と近い関係にあり、こうした人脈は、その後ロシアでの活動や本国との連携を容易にしていたといえるだろう。政府としても、現地から直接情報を取ってくるのが可能な日本人と関係を持つておくことは、対外政策の決定に少なくない影響を与えたはずである。

### (2) 遣露留学生として

露都に到着後、西はサンクトペテルブルク大学の法政科に入学した。留学生でありながら「其の裏面の任務は、露国の国情を調査して、我が政府に報告する」<sup>90)</sup>ことであるため、その任務も怠らなかつたという。

岩倉使節が露国に到着する前、大久保はパリから西に宛てて、「魯国政體規則

並ニ地方官ノ規則御取調の上御翻譯被成下度奉願候<sup>91)</sup>」と、調査を依頼している。この調査結果については確認できていないが、パリより急遽帰国した大久保は、木戸を經由して調査結果を受け取り「半當分政體御取調中大に参照スヘキモノ有之有益相成候右厚御禮申上候<sup>92)</sup>」と、その内容に満足している。このような、日本の近代化に対する参考情報の調査のほか、英露のキューバ情勢について話題にしたり、「新聞ハ固ヨリ宛ニナラス其地ニテハ何様ノ説ニ候哉……若異聞モ有之候ハ、御序ニ爲御知被下度相願候也<sup>93)</sup>」と、露国政府の動向を調べるよう依頼もしている。これらのことから、西は留学生として露都に滞在しながら、ロシア事情やロシア政府の動向まで調査する任務をこなしていたことがうかがえる。

明治4年、国内の留学生制度が整うに従い、西も文部省の留学生となった。官費の支給が打ち切られた後も自費で留学を継続し、明治9年にサンクトペテルブルク大学法政科を卒業した<sup>94)</sup>。卒業後は「露國の國情を知るため、露都の新聞社に入り、記者となり筆を執って居た<sup>95)</sup>」という。また、ペテルブルク大学在学中には、同大東洋学部日本語学科（Восточный факультет, Кафедра японоведения）で講師も務めていたという。明治3年に体系的な教育を確立した当時の日本学科には大学所属の日本人講師がおらず、日本公使館から人員が派遣されていたという<sup>96)</sup>。つまり、西は留学生でありながらロシア側には日本の外交使節団の一員と見られていたようだ。優秀な日本学者を多数輩出したペテルブルク大学日本学科の講師は、橋耕斎、西徳二郎、安藤謙介と引き継がれ、やがて専任の教師として明治21年に黒野義文が着任する<sup>97)</sup>。

### （3） 外交官として——臨時代理公使時代までを中心に

明治9年3月14日、西は仏国公使館二等書記生に異動した。赴任命令の理由は、公使が同郷の鮫島尚信であったほかに、ペテルブルク大学在学中に、ロシア語とフランス語に精通したこと、ペテルブルク大学での教育はフランスの影響を強く受けており、フランスの大学を卒業したのと同様であること、また、当時の露仏関係が密接で、仏国公使館で露国の事情を収集し、ロシア人と自由に対応できる者を置く必要があったこと、などがあげられる<sup>98)</sup>。明治11年2月まで、約2年間在勤した。明治10年4月7日には、書記一等見習に昇進している<sup>99)</sup>。

明治11年2月16日、外務二等書記官に昇進し、露国在勤を命じられたため、パリよりペテルブルクへ戻ってきた<sup>100)</sup>。また、帰国する榎本武揚に代わり臨時代理公使となった。在任中は万国電信連合条約への加盟・会議出席に関する一件や、

北海道産魚類の露国輸出計量についての案件、また条約改正のためのロシア外務省との予備交渉などを取り扱った<sup>101)</sup>。また、明治13年2月(露暦1月21日)に露国で客死した有田源三郎については、逝去後の世話をし、本国と連絡・調整も行っている<sup>102)</sup>。なかでも万国通信連合条約に関しては、明治12年1月29日に加入の調印をして成立させたことを、本省へ報告している<sup>103)</sup>。万国通信連合は万国郵便連合とならび、明治時代の最初期から存在した国際機関であり、万国通信連合条約の締結は日本の対国際機関外交の一里塚であったといえる。条約調印後は、倫敦で開かれる万国電信会議に日本が参加できるように、仏在勤の鮫島、本省の寺島外務卿等と連携して英仏露各国に掛け合った<sup>104)</sup>。結果として、吉川顕正ほか2名が会議に参加したことが記録されている<sup>105)</sup>。このロンドン会議は、administrative conferenceであったが、1875年のペテルブルク協定の更改について話し合い、その成果はペテルブルク協定の附属文書としてまとまった<sup>106)</sup>(なお、1875年にペテルブルクで万国通信連合の会議が開かれており、この時にペテルブルク協定が締結された)<sup>107)</sup>。日本の対国際機関外交の立ち上げにも、西は携わっていたのである。

西の公使としての生活環境だが、着任後最初の5か月ほどは公使館内に住んでいたものの、明治13年6月には露都郊外に一民家を借り上げ、田園生活を始めたという。郊外に移ってからは乗馬も練習し、馬で出勤することもあったようだ。館務の他に、美術学校教授のグリゴローウィッチの下で絵画を学んだり、タラウエル嬢に音楽を学び、ピアノを購入して研究したりもしていたという<sup>108)</sup>。「演劇も好んで劇場に赴き、舞踏にも熟練して夜会にも赴き、露国の皇華族大官朝野の名士、各国公使等と親善を加へ、露都の社交界にては、信用と徳望とを博し、諸方面に重んぜられ、又優遇され<sup>109)</sup>」るなど、ロシア文化への造詣も深めていたほか、アレキサンドル二世とも親しく謁見するなど、ロシアの皇族や政府関係者との人脈形成にも動んでいたようだ。社交を通じて人脈形成に勤しむ姿勢は、その後の公使時代にも共通する西の手法であった<sup>110)</sup>。加えて、英語の練習も行うなど、絶えず自己研鑽に励んでいたようだ<sup>111)</sup>。

明治12年9月24日、西は任期を終えるにあたり中央アジア経由で帰朝する休暇を願い出た。この中央アジア旅行は「私的な探究調査と公的な偵知任務とが、いわば渾然一体としながら同時並行的に実践されていた<sup>112)</sup>」のが実態だったが、「中央アジアへの外国人の立ち入りを警戒し制限しようとするロシア当局に対し、西は旅行が完全に学問上の目的によっており、軍事機密を他国にもらすこともな

いと請け合うことで、辛うじて許諾をかちとった<sup>113)</sup>』という。「西がロシア滞在中に中央アジアに関心を払い続け、それが同地への旅行を直接的に動機づけた<sup>114)</sup>」が、「西の中央アジア旅行が当初から多少なりとも公務としての色彩を帯びていた<sup>115)</sup>』といえよう。特にイリ情勢は「日本にとって、露清それぞれとの政治・安全保障関係の在り方や外交上の優先課題たる対列強不平等条約改正交渉の成否、換言すれば、概して自らの国際的立場に直接的な影響を及ぼす、極めて重大な問題<sup>116)</sup>』として、当時の日本政府はかなり注目していた。したがって、おのずからイリの視察は彼の中央アジア旅行の主目的の一つとなった<sup>117)</sup>。明治13年7月20日、西は露都を出発した。この中央アジア旅行により、西ははじめて中央アジアを踏査した日本人となった<sup>118)</sup>。この時の旅行記は『中央亜細亜紀事』としてまとめられ、「日本人がはじめて実地の見聞にもとづいて中央アジアの地誌を体系的に記述したものであるのみならず、同時代のロシアおよび欧米の軍人東洋学者や旅行者が残したすぐれた観察記録にもひけを取らない精度で記され<sup>119)</sup>」た書物となった。なおこの帰朝は実に、明治2年に出国して以来の帰国であった。

#### (4) その後

西は帰国後も外務省に勤務した。本省勤務に加え、有栖川熾仁親王の訪露に随行したり、その後2度にわたって特命全権公使を拝命するなど、日清・日露両戦争を経て激動する大陸情勢と対峙し続けた<sup>120)</sup>。明治30年11月6日外務大臣就任時は、当時の外交課題であった対朝鮮問題と対露問題の双方に対応できる人物として白羽の矢が立ったようだ。「對韓問題のみならば、京成公使であつた小村が居るから遺憾はないも、對露問題に於いては、露国の事情に精通して居り、而も前年、山縣を扶けて朝鮮の事に関する日露協約を成立せしめたる西氏であらねば、當面の問題を決裁し得るものは、他になかった<sup>121)</sup>」のである。西は在外公館勤務と本省勤務双方を経験し、ユーラシア大陸の東西の事情に明るい人材として、明治政府内における稀有な存在であった。

#### 4 小 括

本章では、明治最初期のロシア留学生について、主に政府関係者を中心に検討した。西などごく一部を除き、多くが公家または旧幕府の勢力が強かった土地出身の留学生が多いことが目立つ。他国への留学生との比較は今後の課題だが、少

なくともロシアへの政府関係者の留学に、明治維新当初の薩長藩閥の影響は見られないと言って良からう。また、明治最初期にロシアへ留学した人物たちは、その後も対露外交並びに極東情勢に関わりながらキャリアを積んでいった人たちが目立つ。彼等のロシア留学の経験は、明治時代の対露外交を支えたといえるだろう。

また、西徳二郎のロシア留学および臨時代理公使時代については、先行研究である坂本辰之助氏の『男爵西徳二郎傳』の記述に、断片的ではあるが資料的な裏付けの補強を試みた。明治時代きってのロシア通であった西のキャリアの形成過程を検討することは、明治時代の日本人のロシア観を明らかにするほか、当時のロシアにおける在外使臣の動向を紐解くことにもつながると考えられる。

#### Ⅳ 明治最初期の在露日本国公使館の様子について ——勤務者・関係者を中心に

明治初期のロシア語教育が、対露人材の育成を主眼とするきらいがあったことは前章で述べた。外交の最前線は在外公館である。明治政府にとって、また幕末の徳川政権にとっても、在外使臣制度を整備することは、独立した一国として近代国際社会で生き抜くために喫緊の課題であった。そこで本章では、ロシア語・ロシア事情に明るい人材が一定数配置されていたと思われるベテルブルクの在露日本国公使館の様子について、その沿革と内部体制の一端を明らかにする。対露外交担当者がどのように育成・配置されていたのかに注目したい。

##### 1 在露日本国公使館の設立経緯について

幕末以降、日本は近代的な外交機構を整備する必要に迫られた。江戸幕府は寛政4（1792）年に海防掛を設置し<sup>122)</sup>、安全保障政策としての海防の実務機関を整備した。その後安政5（1858）年に外国奉行（外国方）を設置。これにより、「諮問機関である海防掛と実務機関である各奉行や諸掛が個別に外交問題を処理する体制<sup>123)</sup>」が「それぞれの機能が統合され、初めて総括的な外交機構が整備されることになった」<sup>124)</sup>。外国奉行は幕末の混乱期において一貫して対外政策の立案・実行を担っていた。「幕府瓦解後も存続したが、その廃止時期は明確ではない<sup>125)</sup>」が、慶應3（1867）年10月の大政奉還以降明治政府外務省が発足するまでの2年弱の間、体制変動のはざままで日本外交の実務を担い続けていた点には注目

すべきだろう。

慶應3年10月の大政奉還後、「政体書」により「外国官」が設置された。その後明治政府が発足し、明治2（1869）年8月15日には外務省が設置された。そして明治3（1870）年11月には、英・仏・プロシア・米各国で「弁務使」駐在が開始された。ここに近代日本における在外使臣制度の始まりを見ることができる。明治5（1872）年には外務省内の職制が整い、同年までに、ワシントン、ロンドン、パリ、ペテルブルク、ウィーン、ベルリン、ローマ、北京に公使館が設置された<sup>126)</sup>。ペテルブルクに公使館が設立された日を特定することは難しいが、明治7年の花房義質の日記によると、公使館としての物件を確保したのは明治7年の春であるといえそうだ。五月十二日に公使館兼勤務者住居として使う建物について、「今日ビッコフ氏へ家之事終に決す。寝具其他家具類買入方奔走。」<sup>127)</sup>と、ビッコフ氏との間で話を付けたとある<sup>128)</sup>。その前日十一日には「朝バタ氏来る。家之事を談す。ダリン氏も来り。同しく談して同氏に委任しベビコフ氏に往しむ。明朝来報すへき筈也。五百ルーブルをも同氏に附す<sup>129)</sup>」ともある。四月十九日の日記には「家見に行く。一は極て盛美之家にて一年壹万ルーブルといふ。過美故不取。」<sup>130)</sup>という記述があるなど、5月12日に話がまとまるまで、何件か内覧をして条件に合致する物件を探していたことがうかがえる。最終的にビッコフ氏の家を公使館にしたそうだが、この物件の住所は「на Дворцовой наб., 12<sup>131)</sup>」であったという。この場所は現在でも存在し、ネヴァ川沿いのエルミタージュ美術館の近く、ペテロパフロフスキー要塞の対岸という位置<sup>132)</sup>は、花房の明治7年5月14日の日記にある以下の記載と相違ない。

「午後転宿ビッコフ氏の家にドヴァルツケヴテイナベルジナ（皇宮畔河岸）に移る。家子ヴァに臨みペートルパウロスキークレポスチャ（ペートル城、即ペートル自ら築ける城也）に対し皇宮及び大理石殿に伴ひ夏園に遠からず。外務省に接し最便且浄潔之地也。」<sup>133)</sup>

また、この建物は、19世紀後半は所有者が度々変わっていたらしく、花房が契約を結んだ「ビッコフ氏」という人物は、「Лазарь Яковлевич Поляков」（ラザリ・ヤーコヴレヴィッチ・パリコフ）という、有力な実業家であつ銀行家であつた人<sup>134)</sup>であろう。ともあれ、「外務省に接し最便且浄潔之地也」という好立地な場所に公使館を設置できたことは幸運だったといえる。

ペテルブルクの他に対露外交に関係する官庁として、明治2年に、北方問題に対応する部署として設置された開拓使もあげられる。初代長官は黒田清隆だ。開拓使は国内の機関であったが、隣接する樺太・ロシア極東情勢の最前線に接する官庁であった。明治初期に対露外交担当者が必要とされていたのは、開拓使を中心とする北方対応の担当と、ロシアに対する在外使臣であったと言えそうだ。本論文では開拓使および極東におけるロシア語人材の検討は行わないが、明治初期のロシア語人材は、国内では北海道、ロシアではペテルブルクと極東（ウラジオストク、コルサコフ）を拠点に求められていたことは付記しておきたい。

次に、在露公使館内の職制について確認したい。明治3年、「外務省に常置在外使臣として、大・中・小の弁務使および大・小記が設置されることが内外に布告」<sup>135)</sup>された。以後諸外国の例を参考にしながら、職制の改革を重ねるなどし、明治政府は在外使臣制度を整えていった。明治18年の外務省職制では、「外国に駐在し外務卿の指揮を受け其国と交際の事務を担当す」<sup>136)</sup>として特命全権公使、弁理公使、代理公使が、「外国に駐在し外務卿大蔵卿の指揮を受け貿易事務を管理し兼て我国人の其国に在留する者を保護す」<sup>137)</sup>として総領事、領事、副領事が置かれた。続いて、「公使に随従して庶務を掌理す」<sup>138)</sup>として、一等書記官、二等書記官、三等書記官が、「公使領事に随従して庶務に従事す」<sup>139)</sup>として、一等書記生、二等書記生、三等書記生が置かれた。明治19年の勅令第5号「交際官及領事官制」では、特命全権公使、弁理公使、代理公使、公使館参事官、公使館書記官、交際官試補、および書記生と無任所外交官の設置が明記されている<sup>140)</sup>。

在露日本国公使館では、明治7（1874）年に榎本武揚が事実上の初代公使として着任以後、日露戦争のため明治37（1904）年に引き揚げるまで、延べ17名の公使（臨時代理公使、重複を含む）が着任し、日露外交の最前線を率いてきた。本稿では、主に「太政類典」（国立公文書館蔵）を用いて、明治14年ごろまでを中心に、当該期間における在露日本国公使館の勤務者の総覧を試みる。

## 2 初期在露日本国公使館勤務者・関係者について

### (1) 公使館設置前

#### (a) 幕末～明治6年

近代国際秩序のなかで、日本とロシアが正式に国交を結んだのは、1854年の日露和親条約である。しかし、在露日本国公使館の設置は1874（明治6）年まで待たねばならない。つまり、日露和親条約締結から公使館設置までの約20年間、日

露外交の実務は、公使館の存在なしに遂行されていた。ロシアでは当初ゴシケーヴィッチと橘耕斎がその任務を担っていたと考えられる。日露交流史を見ていくと、日本人のロシアへの外交使節団の渡航は、文久の竹内遣欧使節団のロシア滞在、小出秀実一行の遣露使節団、明治4（1871）年の岩倉使節団、そして明治7年の公使館設置という流れを確認することができる。岩倉使節団訪問時、ロシアで便宜供与を担ったのは、ゴシケーヴィッチとアジア局の役人とともに、様々なルートで幕末から明治最初期にロシアに渡航した少数の日本人であった。なかでも、使節団の公式通訳は西徳二郎が務めており、市川文吉が補佐を担った<sup>141</sup>。また、橘耕斎もロシア事情を伝えるべく使節団に招かれており、そのまま岩倉の勧めで帰国を果たした<sup>142</sup>。

#### (b) 明治7年——花房代理公使時代

初代公使として内定していた沢宣嘉が急逝したのに代わって、臨時代理公使として花房義質がペテルブルクに赴任した。彼は「臨時公使としてマリアルース号事件の交渉と国境確定予備段階交渉に当たるといふ二つの重要な使命<sup>143</sup>」を担っていた。花房時代には、露国の仲裁でマリア・ルース号事件の裁判が進み、「事件解決に努め、秘魯国よりも公使が来り、露国當局者と折衝し、仲裁の裁判は我が国の勝利となり、四十万圓の損害賠償は免れて解決した」<sup>144</sup>。他に公使館の建物や設備の整備や、北方の国境画定交渉の準備を進めるなど<sup>145</sup>、対露外交の基盤を整えるべく奮闘していた。目の当たりにした「アジアにおける大国の覇権地図の分割をめぐる大国間外交戦略などが花房の職業的関心呼び起こすきっかけとな<sup>146</sup>」り、「語學研究の志を起し、辞職を乞ふたが許されず、二ヶ年ほど露都に在り、後ち註鮮公使となって去った」<sup>147</sup>。花房と同時に赴任したのは、中村博愛（二等書記官）、志賀親朋（三等書記官）（7年8月に一等書記生から陞叙）、山内勝愛（一等書記生）、内藤忠順（三等書記生）であった。また、この時の留学生には、西徳二郎と寺見機一が確認できる<sup>148</sup>。日記には、三月二十八日付で「午十二時外務所へ至り、太政大臣兼外務卿プリンスゴルチャコフ殿下に謁し信書を呈す」<sup>149</sup>とある。この日以後、榎本着任までの間、花房は代理公使として活動した。この間、留学生（公使館附書記見習）として渡航していた高木報造、古川常一郎、二木彦七は公使館附書記に昇格し、外交実務に従事するようになった<sup>150</sup>。

## (2) 公使館設置後

榎本武揚が正式に露国公使として派遣されたのを皮切りに、その後明治11

(1878)年7月26日に西徳二郎(臨時代理公使・外務三等書記官)、明治13年5月28日に柳原前光(特命全権公使)、明治16年に花房義質(特命全権公使)、明治19年に再び西徳二郎(特命全権公使)、明治24年に大前退蔵(臨時代理公使・公使館一等書記官)、そして明治26年に再度西徳二郎(特命全権公使)が赴任している<sup>151)</sup>。以下では各公使で時代分けをし、公使館の構成員と彼らの動向を明らかにしたい。「太政類典」に収められている明治14年までを対象に館員の動向を明らかにする。

#### (a) 榎本武揚時代 明治7年～明治11年

榎本は沢の急死に伴い急遽起用された。官位は海軍中將<sup>152)</sup>で、明治7年に露都に到着し公使に就任した。着任時の公使館職員は、花房義質(外務大丞兼二等書記官)、市川文吉(魯語通訳)、内藤忠順(外務二等書記生)、寺見機一、西徳二郎(留学生)であったという<sup>153)</sup>。榎本の着任に伴い、花房は二等書記官に異動した。

また、留学生として渡航していた高木報造(佐賀県士族)、古川常一郎(佐賀県士族)、二木彦七(鹿児島県士族)の3名は、明治6年、館務拡大につき体制強化のため、選抜されて外務二等書記生に任命された<sup>154)</sup>。特に二木は最終的に明治4年出発の開拓使留学生としてロシアに派遣された唯一の人物であった<sup>155)</sup>。二木は榎本公使着任後、「書記官見習として事務を執りながら、農学、鉱山学の専門学校に学び、明治十一年、ドイツ、オーストリア、イタリアを経て帰朝し<sup>156)</sup>」た。帰国後は「黒田長官を助けて北海道の治政に貢献するところが多く、その後長い間、函館の官界や実業界に活躍した<sup>157)</sup>」という。

古川は明治4年に官費留学生としてウラジオストクに派遣され、この地で個人教授を受けてロシア語を学んだようだ。彼は榎本公使が帰国後に帰国したのちは、東京外国語学校の魯語学教員として働いたほか、市川らとともに『露和字彙』の編纂にも携わった<sup>158)</sup>。

#### (b) 西徳二郎(一次)時代 明治11年～明治13年

西徳二郎は、明治9年より在仏国公使館付書記二等見習として勤務していたが、11年にパリからロシア在勤に戻り、臨時代理公使を拝命した。在任中の活動の概略は、前章で紹介したとおりである。西公使の下では、「書記官に長田銈太郎、書記生の大前退蔵、高木報造、二橋謙、曲木如長、安藤謙介、駐在武官の陸軍少佐山本清賢等が居た<sup>159)</sup>」という。史料によると、明治11年11月に河島醇(外務一等書記生)<sup>160)</sup>が、明治12年に大前退蔵(外務二等書記生)<sup>161)</sup>と長田銈太郎(外務二等書記官)<sup>162)</sup>が配属されている。また、陸軍少佐の山本清堅は、明治11年5月に外務二等書記生として露国公使館赴任を命じられている<sup>163)</sup>(明治14年2月に帰

朝)<sup>164)</sup>。明治13年3月には、二橋謙(外務二等書記生)がローマから転勤<sup>165)</sup>を命じられている。曲木は、西の帰国直前に着任したため、柳原公使のもとで主に勤務していたと推察できる。安藤の動向については一層の史料の精査が待たれる。

(c) 柳原前光時代 明治13年3月～明治16年3月

榎本に続いて特命全権公使として赴任した柳原前光である。明治13年3月8日に辞令が出ている<sup>166)</sup>。在任中は「本務に従事する傍ら欧州各国の帝室制度を調査し、のちに来欧した伊藤などへ自らの皇室制度論を披歴<sup>167)</sup>」するなど、公家出身であることを活かした活動も行った。柳原公使の人事は、「帝政ロシアが専制君主制から立憲君主制へと移行しようとし、後者に即した形での宮内省改革が試みられ<sup>168)</sup>」ていたことなど、帝政を敷くロシアの国情を鑑みた配置であったと考えられる。

明治初期は日露の宮廷外交が活発に行われた時期でもあった。明治15年には、有栖川宮熾仁親王がアレキサンドル三世の戴冠式出席のために訪露した。この訪露には、当時本国勤務となっていた西徳二郎や山本清堅も帯同し、便宜供与や通訳等で応援に入っていたようだ<sup>169)</sup>。

柳原の下では、明治13年4月前後に尾崎三良(外務一等書記官)<sup>170)</sup>、高田政久(海軍中秘書、外務二等書記官を兼務)<sup>171)</sup>、曲木如長(外務二等書記生)<sup>172)</sup>が配属されている。また同年11月には、外務二等書記生として勤務していた二橋謙、高木亮両氏が、ペテルブルク勤務を免じられている<sup>173)</sup>。陸軍少佐の山本清堅も、明治14年2月に帰朝している<sup>174)</sup>。しかし二橋については、翌14年に外務二等書記生として再びペテルブルク公使館勤務を命じられている<sup>175)</sup>。明治14年8月には山内勝明(外務三等書記官)<sup>176)</sup>が配属された。

## V 結 び

本論文では、政府関係者を中心に、日本国内におけるロシア語人材育成の実態および明治初期におけるロシア留学生の動向について調査・分析を試みた。そして、在露日本国公使館の体制と構成員に注目し、初期対露外交が、現地でのどのような人物たちによって如何様に展開されていたのか、若干の考察を試みた。

まず、ロシア語教育とロシア留学の連関を鑑みると、明治初期におけるロシア語学習の目的は、ロシア語を通じて何か学問を学ぶことよりは、ロシア語そのものの、あるいはロシア文化を学び、その素養を直接仕事に活かすためであったとい

う側面が強かったといえそうだ。それは、文部省派遣留学生の留学先にロシアがほぼないことから明らかだ。また、特に明治初期ロシアへの渡航者は、公務として渡航している者が多い点も特徴だ。換言すれば、明治維新を経て西洋各国へ積極的に留学生が派遣される中、ロシアへの留学生派遣は、その多くが対露外交担当者を見習いあるいは即戦力として、公使館付で派遣されていることにロシア特有の事情をうかがうことができよう。彼らは留学生でありながら、一方で書記生等として館務にも携わっていた。英米仏独各国への、西洋の知識を吸収する目的で専ら「学生」として渡航した留学と異なり、ロシアへは当初から実務家の毛色を帯びて渡航している点は、ロシア語・ロシア通の育成方法という観点からも興味深い。西など「留学生」の身分で渡航した人物も、何らかの形で公使館とつながりは持っており、彼らはかえって「外交官」の肩書がない身軽さを利用して、よりロシア社会の深部に入り込み、国情を探っていたという見方もできよう。ロシア留学生に特有の事情だったかはさらなる検討を要するが、少なくとも明治初期のロシア「留学生」は、「留学生と諜者の二足のわらじを履く<sup>177)</sup>」状態だったのである。

さらに西などごく一部を除き、渡航者のロシア語の取得は、現地の大学ないし各種学校での学修を通じて達成されたのではなく、日本国内での勉強と対露外交の現場での経験を通じて達成されていたことが推察できる。明治政府がロシア語に明るい人材の育成に取り組み、現地に深く入り込んだ外交を目指していたことは、留学生を公使館付書記生に任命するよう求めた上申書からも読み取れる<sup>178)</sup>。他方、中村博愛のように、フランス語の素養を買われてロシア勤務を命じられた人物もいる。当時のロシアでは特に外交や政府中枢においてフランス語も使われており、対露外交はフランス語でも一定程度遂行できたことが推察できる。ここから、明治初期の対露外交はロシア語とフランス語人材を中心に遂行されていたことも推察される。対露外交においてロシア語の比重が大きくなっていった過程は、日露双方の事情を鑑みた一層の分析が必要であろう。

以上の事から自明なように、当時のロシア語学習は、対露担当者を育てるといふ色彩が強かったといえよう。このことは、彼らが明治時代特有の「立身出世」ルートに乗ったかどうかはさらなる検討が待たれるとしても、ロシア語学習者になった時点で、その進路は、ロシア語力を基軸にある程度方向づけられていたことを意味する。また、旧東京外国語学校卒業生のうち「時の支配勢力だった薩長出身者が皆無に近い<sup>179)</sup>」ことは、魯語科の一つの特徴であろう。「旧幕臣でも有

能な者は盛んに登用され……学問さえできれば国家が雇傭する」<sup>180)</sup>として、外国語学校には官費生制度があった。このような制度により、外国語という新たなスキルを身に付け、キャリアを積んでいくチャンスを提供した点で、旧東京外国語学校が旧幕府側の人物の受け皿になっていた面はあるだろう。しかし、「立身出世とか生活の資を稼ぐという意味では、ロシア語の勉強はほとんど魅力あるものではなかった<sup>181)</sup>」という空気が当時の魯語科に既にあったのであれば、ロシア語ができることは、政財界における立身出世よりも、現場で実務家になるキャリアへつながっていたのかもしれない。事実、第Ⅱ章で記したような初期の魯語科卒業生たちは在外公館や学術・教育機関を中心にキャリアを積んでいる。また、現場重視のロシア語実務家に対する立身出世の意識は、当時の日本における「通訳者」ないしは外国語人材の社会的地位を示唆するものとしても興味深い。

語学習得と当該国担当者となる進路の相関が、ロシア語特有の事情だったのか、他の言語にも共通する傾向だったのかは、今後一層の調査と分析を要する。明治初期に政府で特に求められていた英・仏・独・露・清・朝鮮各語について、各語学教育の形成過程を比較検討することは、近代以後日本社会で各語に与えられた印象や先入観を分析することにもつながると考える。例えば、現代においてもロシア語の学修と将来の進路選択は連動して捉えられるくらいが否定できない。また、進路選択が関わってくるとの先入観ゆえに、ロシア語を第二外国語に選択する心理的ハードルが上がっている可能性もある。このような要素が、ロシア語履修者が依然として少ない潜在的理由だとしたら、その傾向は既に近代化へと走り出した明治時代初期から見られたものであったといえるだろう。とある外国語の学習者になる、という行為自体が内包する意味について、今後も検討を重ねていきたい。

同時に、幕末・明治の体制変動と近代化のなかで、外国語力を活かして外交に携わり、近代国際社会で日本の立場を確立させていこうと奮闘していた実務家の存在を浮かび上がらせることは、外国語の取得と外交力の連関を検討する第一歩となるはずだ。外国語学習それ自体は一個人の営みであるが、そこに国家の意向や官僚の育成という要素が加わった時、その外国語学習は極めて政治的・外交戦略的な意味を持つ営みとなり得ることについて、一層の分析ができよう。ただしこれは国家の役人に対して当てはめた場合であって、一般の外国語学習者にこのような「国家戦略としての外国語学習」を当てはめようとするのは本来ふさわしくない。日本は近代化を進める中で、外交・安全保障戦略としての外国語学習・

地域研究と、多文化理解、西洋文明の受容といった教養の深化を目的とした外国語学習・地域研究を如何様に両立させようとしてきたのか。その相克が顕著な言語の一つがロシア語であるといっても語弊はなからう。

- 1) 外務省HP、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/staff/challenge/index.html> (2021年10月19日閲覧)。
- 2) 旧東京外国語学校魯語科については、東京外国語大学史編纂委員会編『東京外国語大学史：独立百周年（建学百二十六年）記念』（東京外国語大学、1999年）および野中正孝『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』（不二出版、2008年）に詳しい。また、日本ロシア文学会『日本人とロシア語—ロシア語教育の歴史』（ナウカ、2005年）は日本におけるロシア語教育を江戸から平成まで概観した書である。
- 3) 内藤遂『遣露伝習生始末』（東洋堂、1943年）、宮永孝『幕末おろしや留学生』（筑摩書房、1991年）、杉本つとむ『十八・十九世紀日魯交流人物史話』（東洋書店、2013年）など。
- 4) 榎本武揚、加茂儀一編集・解説『榎本武揚：資料』（新人物往来社、1969年）、井黒弥太郎『榎本武揚伝』（みやま書房、1968年）など。
- 5) 坂本辰之助『男爵西徳二郎傳』（ゆまに書房、2002年）（初出は1933年）。
- 6) マリツェヴァ・スベトラーナ「駐露時代（1883-1886）の花房義質」（大阪大学博士論文、2009年）、木村暁「ウズベキスタン伝存の西徳二郎書簡をめぐって」（『アジア・アフリカ言語文化研究』第88号、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2014年）、醍醐龍馬「榎本武揚と樺太千島交換条約（一）：大久保外交における「釣合フヘキ」条約の模索」（『阪大法学』第65巻第2号、2015年）、醍醐龍馬「榎本武揚と樺太千島交換条約（二・完）：大久保外交における「釣合フヘキ」条約の模索」（『阪大法学』第65巻第3号、2015年）、原科颯「駐露公使・柳原前光の皇室制度論」（『法学政治学論究』第127号、2020年）など。
- 7) 斎藤洋子「花房義質関係文書 明治七年「日記」」（『外交史料館報』第34号、2021年3月）、前掲「駐露時代（1883-1886）の花房義質」などで、駐露公使時代の花房義質の日記や記録の翻刻が試みられている。
- 8) 宮永孝「幕末ロシア留学生 市川文吉のこと」（『社会労働研究』第37巻4号、法政大学社会学部学会、1991年）、原平三『幕末洋学史の研究』（新人物往来社、1992年）、宮永孝「幕末ロシア留学生市川文吉に関する一史料」（『社会労働研究』第39巻4号、法政大学社会学部学会、1993年）、沢田和彦「ゴンチャロフと二人の日本人」（『スラブ研究』第45号（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、1998年）、前掲『十八・十九世紀日魯交流人物史話』211-249頁など。
- 9) 前掲『日本人とロシア語—ロシア語教育の歴史』3頁。
- 10) 同上。
- 11) 同上。

- 12) 同上。
- 13) 前掲『十八・十九世紀日魯交流人物史話』214頁。
- 14) 前掲『十八・十九世紀日魯交流人物史話』215頁。
- 15) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』7-8頁。
- 16) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.A07062112800 (第13画像目)、国立諸学校 (国立公文書館)。
- 17) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』13頁。
- 18) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』9頁。
- 19) 前掲 JACAR : Ref.A07062112800 (第13画像目)。
- 20) 前掲『日本人とロシア語—ロシア語教育の歴史』39頁。
- 21) 前掲 JACAR : Ref.A07062112800 (第14画像目)。
- 22) 同上。
- 23) 「東京外国語大学沿革略図」(東京外国語大学史編纂委員会編『東京外国語大学史：独立百周年 (建学百二十六年) 記念』東京外国語大学、1999年)。
- 24) 前掲 JACAR : Ref.A07062112800 (第18画像目)。
- 25) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』46頁。
- 26) 前掲 JACAR : Ref.A07062112800 (第18画像目)。
- 27) 同上。
- 28) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』13頁。
- 29) マーチニコフ著・渡辺雅司訳『回想の明治維新』(岩波文庫、1987年) 272頁。
- 30) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』43頁。
- 31) 同上。
- 32) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』92頁。
- 33) 前掲『日本人とロシア語—ロシア語教育の歴史』47頁。
- 34) [https://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/mnj/d/guide/b/k/kojima\\_kuratarou.html](https://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/mnj/d/guide/b/k/kojima_kuratarou.html) (2022年1月3日閲覧)。
- 35) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』128-130頁。
- 36) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』127-128頁。
- 37) 前掲『日本人とロシア語—ロシア語教育の歴史』47頁。
- 38) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』92頁。
- 39) 同上。
- 40) 同上。
- 41) 同上。
- 42) 渡辺雅司「東京外国語学校魯語科とナロードニキ精神—小島倉太郎の講義録をもとに」(『ロシア語ロシヤ文学研究』第15号、日本ロシヤ文学会、1983年) 1頁。
- 43) 平岡雅英『日露交渉史話』(筑摩書房、1944年) 401頁。
- 44) 先行研究として、前掲『東京外国語大学史』794-836頁などがあげられる。
- 45) 渡辺實『近代日本海外留学生史』上 (講談社、1977年) 208頁。
- 46) 犬塚孝明『明治維新対外関係史研究』(吉川弘文館、1987年) 247頁。

- 47) ロシア名はヤマートフ。本名は不詳で、来歴も謎が多い。
- 48) 前掲『日本人とロシア語—ロシア語教育の歴史』26頁。
- 49) 福澤諭吉著、富田正文編『福翁自伝』（慶應義塾、2018年）132頁。
- 50) 同上。
- 51) 同上。
- 52) 前掲『遣露伝習生始末』。
- 53) 前掲『幕末おろしや留学生』。
- 54) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』88頁。
- 55) 同上。
- 56) 前掲『近代日本海外留学生史』上、251,258頁。
- 57) 前掲『近代日本海外留学生史』上、258-259頁。
- 58) 前掲『近代日本海外留学生史』上、261頁。
- 59) 前掲『近代日本海外留学生史』上、266頁。
- 60) 前掲『明治維新対外関係史研究』243頁。
- 61) 田中彰『岩倉使節団『米欧回覧実記』（岩波文庫、2002年）241-244頁。
- 62) 米欧回覧の会・泉三郎編『岩倉使節団の群像—日本近代化のバイオニア』（ミネルヴァ書房、2019年）375頁。
- 63) 前掲『岩倉使節団『米欧回覧実記』』243頁。
- 64) 同上。
- 65) 同上。
- 66) 同上。
- 67) 前掲『明治維新対外関係史研究』335頁。
- 68) 前掲『近代日本海外留学生史』上、276頁。
- 69) 同上。
- 70) 同上。
- 71) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』18-19頁。
- 72) 辻直人『近代日本海外留学の目的変容—文部省留学生の派遣実態について』（東信堂、2010年）22頁。
- 73) 前掲『近代日本海外留学の目的変容—文部省留学生の派遣実態について』31頁。
- 74) 前掲『近代日本海外留学の目的変容—文部省留学生の派遣実態について』20-21頁。
- 75) 辻直人「文部省留学生一覧表」前掲『近代日本海外留学の目的変容—文部省留学生の派遣実態について』巻末資料。
- 76) 前掲『近代日本海外留学生史』上、245頁。
- 77) 同上。
- 78) 前掲『近代日本海外留学生史』上、249頁。
- 79) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A06051171500、西徳二郎（国立公文書館）。
- 80) 前掲『男爵西徳二郎傳』1-2頁。
- 81) 前掲『男爵西徳二郎傳』5頁。

- 82) 前掲『男爵西徳二郎傳』10頁。
- 83) 前掲『男爵西徳二郎傳』12-37頁。
- 84) 前掲『男爵西徳二郎傳』38頁。
- 85) 前掲『男爵西徳二郎傳』39頁。
- 86) 前掲『男爵西徳二郎傳』44頁。
- 87) 同上。
- 88) 前掲『男爵西徳二郎傳』44-45頁。
- 89) 明治3年7月23日付「西徳二郎宛大久保利通書簡」(大久保利通『大久保利通文書』第3、マツノ書店、2005年)539頁。
- 90) 前掲『男爵西徳二郎傳』54頁。
- 91) 明治6年1月27日付「西徳二郎宛大久保利通書簡」(大久保利通『大久保利通文書』第4巻、日本史籍協会、1929年)484頁。
- 92) 明治6年12月9日付「西徳二郎宛大久保利通書簡」(大久保利通『大久保利通文書』第5巻、日本史籍協会、1983年)216頁。
- 93) 前掲『大久保利通文書』第4巻、485頁。
- 94) 前掲JACAR : A06051171500。
- 95) 前掲『男爵西徳二郎傳』69-70頁。
- 96) <https://orient.spbu.ru/index.php/ru/o-fakultete/kafedry/item/110-kafedra-yaponovedeniya> (2022年1月5日閲覧)。
- 97) 同上。
- 98) 前掲『男爵西徳二郎傳』70-71頁。
- 99) 前掲JACAR : A06051171500。
- 100) 前掲『男爵西徳二郎傳』73頁。
- 101) 前掲『男爵西徳二郎傳』74-75頁。
- 102) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C09114108300、公文類纂、1880年、前編、巻10、本省公文、理財部4止(防衛省防衛研究所)。
- 103) 「在露西公使ヨリ万国電信条約中加入電報」(「太政類典」国立公文書館蔵、第三編・明治十一年～明治十二年・第四十二巻・運漕・治水道路) Ref.太00646100-08700。
- 104) 前掲『男爵西徳二郎傳』74-75頁。
- 105) Documents de la Conférence télégraphique internationale (Londres, 1879)、254頁。<https://search.itu.int/history/HistoryDigitalCollectionDocLibrary/4.20.51.fr:200.pdf> (2022年1月3日閲覧)。
- 106) <https://www.itu.int/en/history/Pages/TelegraphAndTelephoneConferences.aspx?conf=4.20> (2022年1月3日閲覧)。
- 107) <https://www.itu.int/en/history/Pages/PlenipotentiaryConferences.aspx?conf=4.4> (2022年1月3日閲覧)。
- 108) 前掲『男爵西徳二郎傳』76-77頁。
- 109) 前掲『男爵西徳二郎傳』77頁。

- 110) 前掲『男爵西徳二郎傳』118頁。
- 111) 前掲『男爵西徳二郎傳』76頁。
- 112) 前掲「ウズベキスタン伝存の西徳二郎書簡をめぐって」14頁。
- 113) 前掲「ウズベキスタン伝存の西徳二郎書簡をめぐって」11頁。
- 114) 前掲「ウズベキスタン伝存の西徳二郎書簡をめぐって」10頁。
- 115) 同上。
- 116) 前掲「ウズベキスタン伝存の西徳二郎書簡をめぐって」21-22頁。
- 117) 前掲「ウズベキスタン伝存の西徳二郎書簡をめぐって」35-33頁。
- 118) <https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/497.html> (2022年1月3日閲覧)。
- 119) 前掲「ウズベキスタン伝存の西徳二郎書簡をめぐって」11-12頁。
- 120) 前掲JACAR: A06051171500。
- 121) 前掲『男爵西徳二郎傳』208頁。
- 122) 大石学編『江戸幕府大辞典』(吉川弘文館、2009年)130頁。
- 123) 同上。
- 124) 同上。
- 125) 前掲『江戸幕府大辞典』127頁。
- 126) 波多野澄雄『日本外交の150年』(日本外交協会、2019年)30-33頁。
- 127) 斎藤洋子「花房義質関係文書 明治七年「日記」」(『外交史料館報』第34号、2021年3月)、131頁。
- 128) 同上。
- 129) 同上。
- 130) 前掲「花房義質関係文書 明治七年「日記」」、125頁。
- 131) Филиппов, А. В., Самойлов, Н. А., & Османов, Е. М. (2018). *ЯПОНИЯ: 150 лет революции Мэйдзи*. СПб.: Изд-во Art-xpress, 2018. 849 С. Исследования российских и зарубежных учёных, посвящённые 150-ой годовщине революции Мэйдзи [«Issues Of Japanology = Вопросы японоведения» №7]. Издательство. 513頁。
- 132) <https://www.google.com/maps/place/Dvortsovaya+Naberezhnaya,+12,+Sankt-Peterburg,+%E3%83%AD%E3%82%B7%E3%82%A2+191186/@59.9421,30.3147205,15.75z/data=!4m13!1m7!3m6!1s0x469631124543213d:0xfe654a8d3253c473!2zRHZvcnRz b3ZheWEgTmFiZXJlemhuYXlhLCAxMiwgU2Fua3QtUGV0ZXJidXJnLCDjg63jgrfjg qIlgMTkxMTg2!3b1!8m2!3d59.944551!4d30.3233014!3m4!1s0x469631124543213d:0xfe654a8d3253c473!8m2!3d59.944551!4d30.3233014> (2022年1月4日閲覧)。
- 133) 前掲「花房義質関係文書 明治七年「日記」」、131頁。
- 134) 前掲『ЯПОНИЯ: 150 лет революции Мэйдзи』513頁。
- 135) 犬塚孝明「明治初期対ヨーロッパ外交の形成と在外公館実務—初代駐仏公使鮫島尚信を中心に—」(明治維新史学会編『明治維新と西洋国際社会 明治維新史研究5』吉川弘文館、2001年)150頁。

- 136) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.A07090063200 (第37コマ目から)、単行書・布令便覧 官制一 (国立公文書館)。
- 137) 同上。
- 138) 同上。
- 139) 同上。
- 140) 『交際官及領事官制・御署名原本・明治十九年・勅令第五号』(国立公文書館蔵) Ref. 御00007100。
- 141) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』18-19頁。
- 142) 前掲『日本人とロシア語—ロシア語教育の歴史』50-51頁。
- 143) 前掲「駐露時代(1883-1886)の花房義質」10頁。
- 144) 前掲『男爵西徳二郎傳』67頁。
- 145) 前掲「駐露時代(1883-1886)の花房義質」11頁。
- 146) 同上。
- 147) 前掲『男爵西徳二郎傳』67頁。
- 148) 榎本武揚『シベリヤ日記』(南満州鉄道株式会社総裁室広報課、1939年)、289頁。
- 149) 前掲「花房義質関係文書 明治七年「日記」、114頁。
- 150) 「留学生高木報造外二名公使館付書記ヲ命ス」(「太政類典」国立公文書館蔵、第二編・明治四年～明治十年・第八十三卷・外国交際二十六・公使領事差遣一) Ref. 太00305100-04700。
- 151) 前掲『新版 日本外交史辞典』73頁。なおここでは赴任期間が半年以上の公使を明記した。
- 152) 榎本武揚著、諏訪部揚子・中村喜和訳『現代語訳 榎本武揚シベリア日記』(平凡社ライブラリー、2010年) 8-9頁。
- 153) 前掲『シベリヤ日記』289頁。
- 154) 前掲「留学生高木報造外二名公使館付書記ヲ命ス」。
- 155) 前掲『近代日本海外留学生史』上、245頁。
- 156) 平岡雅英『日露交渉史話』(筑摩書房、1944年) 403頁。
- 157) 同上。
- 158) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』103頁。
- 159) 前掲『男爵西徳二郎傳』74頁。
- 160) 「河島外務一等書記生公使館在勤」(「太政類典」国立公文書館蔵、第三編・明治十一年～明治十二年・第十八卷・外国交際・公使領事差遣) Ref. 太00622100-05000。
- 161) 「高木領事米国紐育へ赴任并大前外務二等書記生露国へ出発」(「太政類典」国立公文書館蔵、第三編・明治十一年～明治十二年・第十八卷・外国交際・公使領事差遣) Ref. 太00622100-03900。
- 162) 「富田外務一等書記官公使館在勤并鈴木外務二等書記官交代帰朝附長田外務二等書記官露国へ出発」(「太政類典」国立公文書館蔵、第三編・明治十一年～明治十二年・第十八卷・外国交際・公使領事差遣) Ref. 太00622100-02800。

- 163) 「山本陸軍少佐公使館在勤」(「太政類典」国立公文書館蔵、第三編・明治十一年～明治十二年・第十八卷・外国交際・公使領事差遣) Ref. 太00622100-04700。
- 164) 「陸軍少佐山本清堅露国ヨリ帰朝」(「太政類典」国立公文書館蔵、第五編・明治十四年・第十卷・外国交際・開港市) Ref. 太00785100-02000。
- 165) 「水品外務一等書記生外十名独逸国其外各国へ在勤」(「太政類典」国立公文書館蔵、第四編・明治十三年・第十三卷・外国交際・公使領事差遣) Ref. 太00718100-03000。
- 166) 「柳原特命全権公使露国在勤」(「太政類典」国立公文書館蔵、第四編・明治十三年・第十三卷・外国交際・公使領事差遣) Ref. 太00718100-04100。
- 167) 前掲「駐露公使・柳原前光の皇室制度論」174頁。
- 168) 前掲「駐露公使・柳原前光の皇室制度論」176頁。
- 169) 前掲『男爵西徳二郎傳』92-102頁。
- 170) 「尾崎外務一等書記官露国在勤」(「太政類典」国立公文書館蔵、第四編・明治十三年・第十三卷・外国交際・公使領事差遣) Ref. 太00718100-04200。
- 171) 「高田海軍中秘書同公使館へ在勤」(「太政類典」国立公文書館蔵、第四編・明治十三年・第十三卷・外国交際・公使領事差遣) Ref. 太00718100-04500。
- 172) 「曲木外務二等書記生外一名露国在勤」(「太政類典」国立公文書館蔵、第四編・明治十三年・第十三卷・外国交際・公使領事差遣) Ref. 太00718100-04600。
- 173) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.A01000061000、太政類典・第四編・明治十三年・第十三卷・外国交際・公使領事差遣 (国立公文書館)。
- 174) 前掲「陸軍少佐山本清堅露国ヨリ帰朝」。
- 175) 「外務二等書記生二橋謙同公使館在勤」(「太政類典」国立公文書館蔵、第五編・明治十四年・第十卷・外国交際・開港市) Ref. 太00785100-02100。
- 176) 「外務三等書記官山内勝明二橋謙露国公使館在勤」(「太政類典」国立公文書館蔵、第五編・明治十四年・第十卷・外国交際・開港市) Ref. 太00785100-02200。
- 177) 前掲「ウズベキスタン伝存の西徳二郎書簡をめぐって」9頁。
- 178) 「留学生ヲ撰ミ公使館付書記ヲ習熟セシム」(「太政類典」国立公文書館蔵、第二編・明治四年～明治十年・第八十三卷・外国交際二十六・公使領事差遣一) Ref. 太00305100-03900。
- 179) 前掲『日本人とロシア語—ロシア語教育の歴史』46頁。
- 180) 前掲『東京外国語学校史—外国語を学んだ人たち』27頁。
- 181) 前掲『回想の明治維新』284頁。